

令和五年度

## 国語問題（L）

### 前期日程

#### 〔注意〕

- 1 問題冊子および解答用冊子は、試験開始の合図があるまで開いてはいけない。
- 2 受験番号は、解答用紙の受験番号欄（計八か所）に正確に記入すること。
- 3 問題冊子のページ数は、表紙をのぞき十五ページである。脱落している場合はただちに申し出ること。
- 4 解答用紙は四枚である。解答用紙をミシン目に従って切り離すこと。
- 5 解答は、解答用紙の指定されたところに記入すること。
- 6 問題冊子の余白は適宜下書きに使用してよい。
- 7 解答用紙は持ち帰ってはいけない。
- 8 問題冊子は持ち帰ること。

次の文章は、偶然性をめぐる九鬼周造の思想を、和辻哲郎の「間柄」論と対比しつつ解釈したものです。和辻によれば、人間は「学生に対して」教師である「（夫に対して）妻である」などといった他者との間柄を生きています。一方、九鬼は、一見安定している間柄の「である」の背後には、人間を一般化し、他の誰かと交換可能な存在にしかねない危うさが潜んでいるものの、それは、この私「がある」ことの唯一性を自覚する機会にもなりうるとしています。この文章は、その指摘からの帰結を論じたものです。これを読んで後の問いに答えなさい。

日常において、「がある」という事実性、偶然性に直面することはほとんどない。変わらない日常のなかで「私の代わりなんていくらでもいる」と<sup>「ぶく」</sup>呟くことはあったとしても、ため息交じりの交換可能性に触れる呟きが、「それでも私はこんなふうにある。それは有り<sup>(ア)</sup>—難しいことだ」などと、「この私がある」ことの唯一性にたどり着くことは滅多にないだろう。日常は、間柄の「である」の規定を定型的になぞることで淡々と続いていき、その安定のうえに多くの人は自らの居場所をつくる。その居場所が間柄の「である」の一般化によって空洞化していったとしても、それは間延びした日常によって隠蔽される。しかし、こうした日常を根柢から覆すようなことが起こることがある。たとえばそれは、大きな災害や、人生を左右するような出会い、あるいは事故や病で生き方が変わるとき、いわば、予期していなかった偶然の出来事と遭遇するときである。予期していなかった偶然の出来事に見舞われるとき、人は二つのことに気づく。第一に、安定していると思っていた日常は、脆く崩れやすいものであること。第二に、日常を安定化させていた、それまでの間柄の「である」という規定は、偶然事を前にして、ほとんど役に立たないということ。たとえば、「私は教師である」ことも「私は妻である」ことも、病に見舞われたとき、あるいは被災者になったとき、いったん無意味な規定になる。それは、間柄の「である」という規定によって築いてきた自らの生の意味づけが消えてなくなることではなく、そうした意味づけが届かないところで、生のありようが変わってしまうという体験である。ここに生まれたことも、病になったことも、自分で選んだことではない。たまたま、そういうふうに産まれ落ちただけのこと、自分の手の届かない事柄である。偶然事との出会いにおいて、このように「である」の下に隠れてい

た、「がある」という偶然的な事実性が裸出する。そのとき、人は自らの生が「無の深淵」に晒さらされていること、安定した日常が「仮小屋」にすぎなかったことを悟る。

こうした体験は、病や災害などのネガティブな事柄との出会いでも、恋における運命的な出会いのようなポジティブな出会いでも、それが予想外の出来事である以上、共通して起こることである。ネガティブな偶然事では、日常が無の深淵に晒された仮小屋にすぎないことに気づき、不安がかきたてられ、ポジティブな偶然事では、それまでのつまらない日常を生きている自分は偽りで、これから本当の自分を見つけるのだという高揚感が生まれる。それらはいずれも「がある」事実性に触れたことによる変化の予兆によって与えられた感情といえる。そして、この「がある」の裸出の背後には、「他でもあり得たのになぜ私」「会わない可能性もあったのに、なぜ今ここで」といった交換可能性が存在する。恋のはじまりの出会いであれば、この交換可能性と偶然性を逆手にとつて「出会わないこともありえたのに会えたのは運命」というふうには、偶然性を必然性に転化することもできるだろう。そうした態度は、「がある」事実性を「有り―難さ」へと反転させて、唯一性を感じ受ける態度につながるものである。だが、災害や病に遭遇することのなかに、「有り―難さ」を宿した唯一性を感じ受けることなどできるだろうか。

まず、注意しておきたいのは、災害や病に見舞われることは、決して運命と呼ぶべきものではなく、あくまでも偶然にすぎないということだ。このことはいくら強調してもしすぎることはない。そもそも、九鬼自身が言うように「運命」とは「偶然が人間の実存性にとつて核心的全人格の意味を有つとき」に必然性を感じられるところで成立するものであり、それは人間が偶然に与えた名称にすぎない。そのうえで、私が言いたいのは、偶然事に遭遇したことで、「がある」ことの事実性が「私がある」ことの「有り―難さ」を知る契機となつて、そこに唯一性が宿ることはあり得るのではないか、ということだ。ただし、そうした経験は偶然において日常が不安定化し、「がある」の事実性に直面しただけでは手に入らない。そこから再び日常という他者とともに「にいる」場に戻る必要がある。

九鬼は、実存が生きる日常を、無に晒され壊れやすい「仮小屋」だと言った。だが一方で、人間が生きる場はこの「仮小

屋」以外にない。どんなに壊れやすくても、不安になりながらも、そこから逃れることはできず、私たちはこの「仮小屋」を補修しながら生きている。「がある」事実性が、足下にある交換可能性、「無の深淵」を垣間見せようと、人は「仮小屋」の日常に戻って「である」間柄にのっとり行為する。いま自分がこのような境遇にあることの理由のなさ、理不尽さをかこち、日常の脆さに怯えながらも、人は日常に戻る。そこにあるのは、偶然事において一旦無意味になったと思われた「教師である」「妻である」といった和辻的な間柄における他者との関係である。再び、その間柄の行為的連関が動きはじめるとき、人は日常のしぶとく残る頑丈さ、空洞化したと見えていた間柄がもつ揺るぎなさを感じるだろう。だが、そうした間柄と日常が揺るぎなくあるのは、そこを生きる人びとが、それぞれに「である」間柄を保ち、積み上げてきたからである。しかも、その「である」間柄を作るのは、それぞれに「がある」の交換可能性に晒された偶然的な存在である。そのような存在がたまたまここに集い、「である」間柄を紡ぎ、日常という安定を作っているという「有り―難さ」。偶然事に直面し、「がある」の交換可能性に気づくことで日常が「仮小屋」であることを知った人は、再び日常に戻ったとき、この日常が成立していることのかげがえなさ、唯一性に気づくことができる。だからこそ、日常に戻った人は、そのなかで真摯に自らの生き方を選ぶ（あるいは選び直す）ことができる。

（中略）

こうした「有り―難さ」は、当事者だけでなく、その周りの人にも波及する。ただし、その波及は必ずしも「有り―難さ」という形をとるわけではない。たとえば、妻が大病を患ったとき、その夫が感じるのは、「なぜ、私ではなく妻なのか」といった痛みだろうし、西日本に暮らす人間が東日本大震災の被災者と会ったときに感じるのは、「安穩と暮らしていて申しわけない」といった一抹の後ろめたさのようなものだろう。偶然事（とくにネガティブな事柄）が起こり、その当事者は「がある」の裸出に戸惑い、不安になりながらも、必死で日常に戻るなかで、日常に宿る「有り―難さ」<sup>(b)</sup>を感受することができるが、そのような当事者を前にして、非当事者はある種の「やましき」のようなものをもつ。だが、それもまた「がある」ことの事実的な偶然性を掴むことではないのか。

(中略)

目の前にいる他者がなぜ病に冒されることになり、自分は健康な者であるのか、それは偶然的なものである。一つの間柄を共有しつつ、両者の立ち位置は偶然的な「がある」によつて決まったにすぎない。その意味で、和辻が考えたのとは異なり、「である」間柄もまた人間が「有つ」ことのできるものではなく、「である」間柄それ自体が、「がある」の事実的な偶然性に貫かれたものである。いま目の前の他者は病に苦しんでいるが、あるいは自分が病であつたかもしれない。二人の間に開かれている一つの「である」間柄のなかにある、彼我の落差に気づいたとき、人は自分の立ち位置が不当なものではないのかと感じる。「やましき」はそこに宿る。しかし、この「やましき」は「がある」に起因するゆえ、解消不可能である。結局、逃げ場のない間柄のなかで「やましき」に駆られ、居心地の悪さを抱えて、苦しむ他者と向き合うことしかできない。偶然事に苦しむ人は時に「なぜ、私だけが」と言うかもしれない。しかし、その問いに回答を与えることはできない。一つの間柄を共有しつつ、互いが事実的な偶然性で隔てられていることを知るとき、非当事者は、無力感を募らせ、苦しむ人を前にして何をなすべきか戸惑うばかりである。だが、それこそが、他者への理解を安易に表明することなく、真摯に他者と向き合うということではないのか。「である」間柄のなかで「がある」ことの事実的な偶然性に気づき、逃げ場なしの状態<sup>(c)</sup>で他者と関わることにそれこそが九鬼の言う「偶然性を堅く掴む」ことから始める倫理の具体的な形ではないだろうか。

(宮野真生子『出逢いのあわい——九鬼周造における存在論理学と邂逅の倫理』堀之内出版

二〇一九年より。出題の都合により、一部改変した箇所がある)

\*裸出——露出に同じ。

問一 傍線部(a)について、どういふことか、説明しなさい。

問二 傍線部(ア)について、「有り—難い」という語は、一般的な感謝の表現としての「有り難い」とどう異なるのか、本文の趣旨をふまえて説明しなさい。

問三 傍線部(b)について、このように言えるのはなぜか、説明しなさい。

問四 傍線部(c)について、なぜ安易に他者への理解を表明するべきでないのか、本文の趣旨をふまえて説明しなさい。

## II

次の文章は、多和田葉子の小説「ゴットハルト鉄道」の一部です。これを読んで後の問いに答えなさい。

ゴットハルト鉄道に乗ってみたいかと言われた。ゴットハルトという名前の男に出くわしたことは、まだない。ゴットは神、ハルトは硬いという意味です。古い名前なので、もうそういう名前の男は存在しないということなのかもしれない。そういう名前の男は見たこともないのに、この名前を初めて聞いてから三分くらいすると、ある風貌が鮮明に浮かびあがってきた。針金のようなひげが顎と頬に生えている。唇は血の色をしていて、その唇が言葉も出てこないのに、休みなく震えている。口をきこうとしない男。目は恐れと怒りでいっぱい、打ち碎かれる寸前のガラス玉のよう。

ゴットハルトの中を通り抜けて鉄道は走る、とスイス人たちは言う。つまり、男の身体の中を通り抜けて走ると言うこと。長いトンネルに貫かれたその山は、聖<sup>\*</sup>ゴットハルトとも呼ばれています。つまり、聖人のお腹の中を突き抜けて走ると言うこと。わたしはまだ男の身体の中に入ることがない。誰でも一度は、母親という女性の身体の中にはまっていたことがあるのに、父親の身体の中というのは、どうなっているのか知らないまま、棺桶<sup>かんきゆう</sup>に入ってしまう。

聖人のお腹の肉の中を走るのだと思つて胸をおどらせ、わたしはすぐに承知した。わたしにこの旅行を依頼してきたのは、音節にアイロンをかけたような丁寧な話し方をするチューリッヒ新報の編集者だった。ゴットハルトは、重いのです。重すぎて、息苦しいのです。だから、異邦人の方に乗ってもらつて、軽くしたいのです。編集者は電話でそう言った。わたしは、この編集者が取材と原稿を依頼しようと思つた日本人の作家本人ではなかった。それは人違いでもなかった。それは詐欺のようなものだつた。

(ア) ゴットハルトは、わたしという粘膜に炎症を起こさせた。それは、まだ行つたことのない海岸の名前を両親から聞かされ、夏休みにはそこへ行くのだと信じ込んだ子どもがかかる熱病と似ていた。ゴットハルト鉄道という言葉が、錆びた鉄の赤みと、まだ冷たい四月の煙った空気と、ひとりで窓の外を見ながら寂しく感じている乗客にしか聞こえない線路の摩擦音などに姿を変えて、炎症を起こした。期待に喉が火照り、うがいをしてから、わたしはライナーに電話した。ライナーは、キール大

学で文学を教えている。まだ教授ではないけれど、四十歳になるまではまだ三カ月あるから、それほど深刻に考える必要はないそうだ。四十歳になると、出世について真面目に考え始めるのだと、よくカフエバーなどで酔っ払ったジャーナリストなどが言っているのを聞く。わたしはまだ十年は出世しなくてもいいということになる。仮に出世したくなくなったとしても、職業がないので出世できない。

ゴットハルト鉄道に乘せてもらうことになったの。とても楽しみにしているの。わたしがそう言うのと、ライナーはちょっと困ったように口ごもって、それは大変なことになったね、可哀そうに。そんな長くて暗いトンネルに君を押し込めてしまうとはね、スイス人もひどいことをするものだ。わたしは思い出した。北ドイツの知識階級に所属したいと思ったら、イタリアの光に憧れなければいけないのです。山やトンネルの中に入ったまま出て来なくなるような意識を持つていては、理解されない。理解されないような意識を持つということは、謎めいていて面白いということにはならない。単に自分たちの仲間ではないということにされてしまう。わたしはそれでいいけれど、ライナーはわたしが仲間たちに理解されないようなことを口にするのをとても嫌がる。ライナーの仲間に理解されない意識を持つわたしは、もうライナーとは関係の無い人間だということになってしまふから。

君は檸檬れもんの花の咲く国を知っているかい、そこへ君を連れていきたい。そんなような詩をゲーテは書いた。イタリアという言葉聞くだけで、ゲーテの目の中にも、明朗な黄金色に染まった廢墟はいきよがたちあらわれたに違いない。粗大ゴミのようにかさばって重たいアコガレを背負って。知識人は、イタリアに憧れる義務がある。ワインを飲む義務がある。でもわたしは、イタリアに憧れることはできないし、ワインなど飲みたくもない。アルコールを身体に注ぎ込むのは面倒くさい。それよりも、ゴットハルトのお腹に潜り込んで、しばらくそこで暮らしてみたい。石油ランプを灯して。缶詰めの豆のスープを暖めながら。暗闇の中で。列車が通過する時だけ、手の甲が明るく照らされるトンネルの生活。南国の光ではなく、山頂から見た景色でもなく、山の内部で視覚を失いたい。だから、わたしはドイツのインテリにも、日本の旅行者にも、仲間に入れてもらえない。なにしろ、インテリたちにとってはゴットハルトは光を遮る障害物に過ぎないし、日本人観光客は、硬い髭ひげの生えた

ゴットハルトなどではなく、清純なユングフラウヨッホなどというところに出掛けたがる。

チューリッヒの古本屋で、感じのいい店主に勧められて、感じの悪い題名の小説を買った。日本語ではどう言ったらいいのかわからない。我々はゴットハルトを貫き通す、というような題名。(トンネル貫通。この貫通<sup>(1)</sup>という言葉には好感が持てない。袋小路とか洞穴の方がずっと美しい言葉だと思う。) 作者はスイスでは有名でも、スイス人以外は誰も知らない巨匠フェリックス・モツシェリンです。日本と同じで、スイスにはそういう巨匠がよくいる。国境付きの巨匠。厚くてハンドバッグには入らなかった。七一四ページ。初めから終わりまで読む気にはとてもなれないけれど、本を適当にべらべらとめくればきつと氣にいたる言葉が見つかりそうな厚さ。そういう本は買っておいた方がいい。

(中略)

この古本屋では、ついでに中央ヨーロッパの地図も買った。ゴットハルトは地図の中央に堂々と寝そべっていた。ゴットハルトがヨーロッパの中心にあるとは知らなかった。でも地図で見る中心など当てにならない。日本で作られた世界地図では日本がいつも中心にあるのと同じで、地図の上では、誰でも自分を中心に置こうとすればできるのだから。

ゴットハルトは地図の真ん中に堂々と寝そべっていた。その爪先は、イタリアに触れていた。左目はチューリッヒ、右目はバーゼル。心臓はシュビーツ。お腹の辺りには山があつて、そこからスイスが生まれたのだと思った。もう少しで、そう思いそうになった。でも、それが嘘だということに、その夜、夢の中で気づいた。ある国が、山の腹から生まれるということはありえない。国を生むことのできる子宮は存在しない。島を生むことのできる子宮がないのと同じです。

その夜、チューリッヒのホテルの部屋で夢にうなされて目が覚めた。書類の山が五つあつた。大切な契約書か何か。真っ赤なじゅうたんの上の書類の山は、上から見ると、十字架の形に積まれていた。目を近づけてよく見ると、書類は白紙。雪のよう<sup>(2)</sup>に真っ白。雪山。ベッドの隣の壁には、雪に覆われたアンダーマットの写真が飾ってあつた。夢から目が覚めた時、初めてそのことに気がついた。山が母親であると信じることに、母親と言っても、それが男であると確信していること、それがなぜか多くの人にとっては快いらしい。富士山だつて同じことだ。なぜあの山が、ニッポンと書かれた絵葉書の写真の中央に写つて

いるのか。まるで、日本という国が、自然と富士山の中から生まれてきたような錯覚を起こさせる。

頭を雲の上に出し、富士は日本一の山、という歌があったような気がして、その歌をベッドの中で思い出して歌おうとした。ところが、頭を雲の上に出しキングコングがやってくる、というメロディーが裏から強く浮かび上がってきて、富士山を飲み込んでしまった。アタマという最初の言葉をちよつと早めに元氣よく歌い始めるだけで、富士山がキングコングになってしまう。

翌朝、チューリッヒ中央駅に行くと、約束の時間までまだ随分余裕があった。ルガノ行き九時三分発の列車に乗るように手紙に書いてあった。九時四十五分にアルトゴルダウに着いたら、ゴットハルト鉄道の運転を四十年続けたベルクさんという人がプラットホームで待っているから、その列車の運転手のいる車両にいつしよに乗せてもらいなさいと書いてあった。ベルクさんは最近定年退職してから、取材に来るジャーナリストの案内などの仕事をしている。

ルガノ行きの列車はすでにそこに止まっていた。列車の顔面にスイスの国旗がくっついていていた。国旗と言っても布でできた旗ではなく、もちろん金属製の紋章です。隣のプラットホームに停車している列車の顔にも、同じく国旗が張り付いている。赤地に白い十字架。もし、日本の長距離列車の顔面に全部日の丸が付いていたら、どんなに嫌な気持ちができるだろう。列車に乗った途端、戦争で集団疎開させられた子ども<sup>(3)</sup>のことが頭に浮かんで、気が滅入るだろう。スイス人たちはきつと国旗を眺める気持ちが全然違うのだ。もしかしたら、これは帆船の舳先<sup>へさき</sup>から首を伸ばしている木製の女の胸像と同じで、魔除けなのかもしれない。山の魔物が、土砂を落としたり、隣をしおらしく流れる小川の水に突然海洋の勢いを与えたりして、鉄道事故など起こすことがないようにと。

多和田葉子「ゴットハルト鉄道」講談社 二〇二一年より。

出題の都合により、一部改変した箇所がある。

\*聖ゴットハルト——ヒルデスハイムの司教で、中世の聖人の一人。

\*ユングフラウヨッホ——名峰の景色を楽しむことが出来るスイスの著名な観光地。

問一 傍線部(1)について、「わたし」が「貫通という言葉には好感が持てない」と考えるのはなぜか、本文に即して説明しなさい。

問二 傍線部(2)について、「富士山だって同じことだ」とはどういうことか、本文に即して説明しなさい。

問三 傍線部(3)について、「わたし」が「スイス人たちはきつと国旗を眺める気持ちが全然違うのだ」と考えるのはなぜか、本文に即して説明しなさい。

問四 傍線部(ア)について、「わたしという粘膜」という表現にはどのような効果があるのか、説明しなさい。

### III

次の文章は、観応年間（一二五〇～一二五二）のころ東北地方を旅した際に記されたものです。これを読んで、後の問いに答えなさい。

明くれば、遠き野辺を過ぐるとて、その野の名を問へば、「これなむ走井<sup>はしりゐ</sup>」と言ふ。あふ人もなくはるかなる道に、山賊<sup>だち</sup>などいひて人をあやまつたぐひ多ければ、旅人も早く行かんことをのみ急ぎ、走る故に、いひつけたるとかや、聞きはべりしやらん。ある時は峰の嵐をかたしき、野原のつゆにふし、ある時は磯<sup>いそ</sup>打つ波に夢をさまし、浮寝の床に袖をしほ<sup>(1)</sup>る。おのづから、草の枕に弱り行く虫の声を聞きて、秋の末葉になりぬることを思ひ、あまの苦屋<sup>くまや</sup>にふし慣れて、月の出潮<sup>でしほ</sup>のほどを空に知る。

かやうに、<sup>(2)</sup>いづくともなくあくがれまかりしほどに、白川の関を過ぎて二十日あまりにもなりしに、広き川のほとりに出でぬ。これなむ阿武隈川なりけり。都にて遠く聞きわたりし所の名なれば、かぎりなく遠く来にけるほども思ひ知らる。わたしもあり舟さしよせて、道行く人ども急ぎのりて出ではべりしに、水上遠く見たせば、重なる山の中に煙のたちのぼるところありしを、舟子どもに問ひしかば、「元弘<sup>\*</sup>の乱れに鎌倉のほろびしより、この煙たちそめて今に絶えぬなり」と語りしこそ、<sup>(a)</sup>いとふしぎなりしか。

舟よりおりてゆく道のほとりに、一つの塚あり。ゆききの人のしわざとおぼえて、あたりの木に、詩歌などあまたかきつけたり。「むかし東平王<sup>\*とうへいおう</sup>といひける唐人の墓なり。故郷をこひつつここに身まかりけるが、その思ひのすゑにや、塚のうへの草木もみな西へかたぶくと申しならはせり」と語る人ありしかば、いとあはれにおぼえて、かの昭君<sup>\*せうきゆう</sup>が青塚<sup>せいづか</sup>の草の色もことわりにぞ思ひやられし。<sup>(3)</sup>誰も旅の空にてはなくなりなば、夜半の煙もなほふるさとのかたにやなびかましと、うき世の妄執もあぢきなくこそおぼえはべりしか。塚のうへに松の木あまた生ひならべるも、<sup>\*</sup>うなる松とはこれにやとあはれなり。物語のためしも思ひ出でらる。

ふるさとはげにいかなれば夢となる後さへなほも忘れざるらむ

それをもなほ過ぎて、武隈たけくまの松のかげに旅寝して木の間の月に心を尽くし、名取川のわたりを過ぐるとは、行く水のかへらぬことをあはれむ。\* 宮城野の木のしたつゆも、まことに笠もとりあへぬほどなり。花の色々、錦を敷けると見ゆ。中にも本荒もとあらの里といふ所に、色などもほかには異なる萩はぎのありしを、一枝おりて、

(ア) 宮城野の萩の名にたつ本荒の里はいつより荒れ始めけむ

と思ひつづけはべりし。この所はむかしは人住みけるを、今はさながらのらやぶになりて、草堂\* 草堂一字よりほかは見えず。(b)この花をもいにしへは散るをや人の惜しみけむと、あはれに思ひやられはべりき。そもそも本荒の萩とは、春やき残したる去年こぞのふる枝に咲きたるをいふなりと、聞きおきはべり。それを古萩ことも申すなり。これは枝ざしなども、なべての萩よりもこははしく、あばらなるにや。本荒の桜などもよみてはべればと思ひ給へしに、今聞きはべれば、もしこの里の名によりてもやよみけむと、はじめて思ひあはせられはべり。

(『都のつと』による)

\* 元弘の乱れ——新田義貞の軍によつて鎌倉幕府が滅ぼされた元弘三年（一二三三）の戦乱。

\* 東平王——中国・後漢の光武帝の子。東平（現在の山東省）の王となつた。

\* 昭君——王昭君。中国・漢の元帝の女官。匈奴きょうどに嫁がされ、その地で没した。青塚はその墓。

\* うなる松——墓のしるしとして植えた松。

\* 宮城野——仙台平野の東部。本荒は宮城野にある地名。

\* 草堂一字——草ぶきの小屋一つ。

問一 傍線部①②③を文脈に即して現代語訳しなさい。③は、「煙」が具体的に何を指すか記すこと。

問二 傍線部(a)について、このように感じたのはなぜか、説明しなさい。

問三 傍線部(b)において、書き手はどのような状況を見てどのような心情になっているか、説明しなさい。

問四 傍線部アについて、次の(一)(二)に答えなさい。

(一) この和歌を現代語訳しなさい。

(二) 和歌によまれている本荒の萩について、この文章全体で二通りの解釈が示されている。その二つをわかりやすく説明しなさい。

## IV

次にあげる文章を読んで後の問いに答えなさい。設問の都合上、返り点・送り仮名を省略した箇所があります。

昔有<sup>リ</sup>長<sup>ニ</sup>者、左<sup>ニ</sup>右<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>人<sup>ヲ</sup>欲<sup>シ</sup>得<sup>ント</sup>其<sup>ノ</sup>意<sup>ヲ</sup>、皆<sup>ク</sup>尽<sup>ス</sup>恭<sup>ニ</sup>敬<sup>ヲ</sup>。長<sup>ニ</sup>者<sup>ハ</sup>唾<sup>つば</sup>時<sup>スル</sup>、左<sup>ニ</sup>右<sup>ノ</sup>之<sup>ヲ</sup>

人<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>脚<sup>ヲ</sup>踏<sup>キ</sup>却<sup>ク</sup>。有<sup>リ</sup>一<sup>ニ</sup>愚<sup>ノ</sup>人<sup>ハ</sup>、不<sup>レ</sup>及<sup>バ</sup>得<sup>ル</sup>踏<sup>ム</sup>、而<sup>モ</sup>念<sup>おも</sup>曰<sup>ク</sup>、「若<sup>シ</sup>已<sup>ニ</sup>唾<sup>スレバ</sup>地<sup>ニ</sup>、則<sup>チ</sup>諸

人<sup>ハ</sup>踏<sup>ミ</sup>却<sup>ク</sup>。欲<sup>スル</sup>唾<sup>セント</sup>時<sup>ニ</sup>、我<sup>ハ</sup>当<sup>ニ</sup>先<sup>ニ</sup>踏<sup>ム</sup>。於<sup>イテ</sup>是<sup>ニ</sup>長<sup>ニ</sup>者<sup>ハ</sup>正<sup>ニ</sup>欲<sup>スル</sup>唾<sup>セント</sup>時<sup>ニ</sup>、此<sup>ノ</sup>愚<sup>ノ</sup>人<sup>ハ</sup>即<sup>チ</sup>

拳<sup>ゲテ</sup>脚<sup>ヲ</sup>踏<sup>ミ</sup>長<sup>ニ</sup>者<sup>ハ</sup>、破<sup>リ</sup>唇<sup>ヲ</sup>折<sup>ル</sup>齒<sup>ヲ</sup>。長<sup>ニ</sup>者<sup>ハ</sup>語<sup>リテ</sup>愚<sup>ノ</sup>人<sup>ニ</sup>曰<sup>ク</sup>、「汝<sup>ハ</sup>何<sup>ヲ</sup>以<sup>テ</sup>踏<sup>ムト</sup>我<sup>ガ</sup>唇<sup>ヲ</sup>齒<sup>ヲ</sup>」。愚

人<sup>ハ</sup>答<sup>ヘテ</sup>曰<sup>ク</sup>、「若<sup>シ</sup>長<sup>ノ</sup>者<sup>ハ</sup>唾<sup>デテ</sup>出<sup>テ</sup>口<sup>ヲ</sup>落<sup>ツレバ</sup>地<sup>ニ</sup>、諸<sup>ノ</sup>人<sup>ハ</sup>已<sup>ニ</sup>得<sup>ミテ</sup>踏<sup>クル</sup>却<sup>ク</sup>。我<sup>ハ</sup>雖<sup>モ</sup>欲<sup>ス</sup>踏<sup>ム</sup>、常<sup>ニ</sup>不<sup>レ</sup>及<sup>バ</sup>。

以<sup>テ</sup>是<sup>ヲ</sup>、唾<sup>スレバ</sup>欲<sup>デント</sup>出<sup>テ</sup>口<sup>ヲ</sup>、拳<sup>ゲテ</sup>脚<sup>ヲ</sup>先<sup>ニ</sup>踏<sup>ミ</sup>、望<sup>ムト</sup>得<sup>ル</sup>汝<sup>ノ</sup>意<sup>ヲ</sup>」。

凡<sup>お</sup>物<sup>よ</sup>須<sup>ハ</sup>時<sup>ム</sup>。時<sup>ニ</sup>未<sup>ダ</sup>及<sup>バル</sup>到<sup>ル</sup>、強<sup>ヒテ</sup>欲<sup>スレバ</sup>為<sup>サント</sup>之<sup>ヲ</sup>、反<sup>か</sup>得<sup>ヘツテ</sup>苦<sup>ニ</sup>惱<sup>ヲ</sup>。以<sup>テ</sup>是<sup>ヲ</sup>、当<sup>ニ</sup>知<sup>ル</sup>時<sup>ト</sup>与<sup>ビ</sup>

非<sup>ザル</sup>時<sup>ニ</sup>。

(『百喻經』による)

\*踏却——脚で踏みつけて除く。地面に落ちた唾を掃除することをいう。

\*得苦惱——悩ましい結果を招く。

問一 傍線部①「欲唾時、我当先踏」を現代語訳しなさい。「唾」の主語を明示すること。

問二 傍線部②「汝何以踏我唇齒」を現代語訳しなさい。

問三 傍線部③「我雖欲踏、常不及」を、すべて平仮名を用いて書き下し文に改めなさい。現代仮名遣いでもよい。

問四 傍線部④「望得汝意」とあるが、愚人はどのようなことを望んだのか、わかりやすく説明しなさい。

問五 傍線部⑤「当知時与非時」とはどのようなことをいうのか、わかりやすく説明しなさい。